真剣で私と戦いなさい!!

御手洗団子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で私と戦いなさい！！

【Ｎコード】
Ｎ４８２１Ｘ

【作者名】
御手洗団子

【あらすじ】
昔、川神学園に子連れ武道娘、西園寺あやめがいた。実力は武道四天王すらも凌ぐ武術の達人であった。その息子、西園寺伸二が川神学園に入学を果たす。亡き母の過ごした学園生活を自分で体感するために――

PROLOGUE

「お前に教える武術は人を傷付けるモノではない。力無き者を助ける術(すべ)である」

幼い頃から母が言っていた口癖の一つだ。今は亡き母の言葉。俺はそれを信念として貫き通している。

物心がついた時から母と一緒に鍛錬をしていた。戦う為でなく、誰かを護るためと。

毎日の修業は、とても苦しかった。毎日毎日同じことの繰り返し、反復練習をするのみ。

実践と称して数々の不良達と戦ってきた日々。そのおかげで刃物や武器に対する対処法が自然と身に着いた。

いつしか俺は川神を中心とする不良グループのカリスマ的存在へと昇華した。

『孤狼の伸二』。一人で川神の不良グループを潰してきた俺に、そんな渾名(あだな)が定着した。

十二歳で不良から川神連合の最年少総長として崇(あが)められたが、初任一日で降りた。理由は他人が勝手に決められたから。まあ頼まれてもなりたくないが。

それ以降も俺は戦いを求められたり舎弟にしてくれと懇願された。しかし全部丁重に断った。

それ以降も母との鍛錬は続いたが、そう長くは続かなかった

中学三年の夏。母は余命三ヶ月と宣言された。

母は豪快に笑った。喜んだ。

「そうか。私はまだ三ヶ月息子と過ごせるのか！！」

俺は複雑だった。病気でもない俺にとっては、あと三ヶ月。一日一日が長く、そして刹那の如く時が進んだ。

産まれながら身体が弱かった母は、実は産まれた当初は余命五年だった。

それが十歳、十五歳、二十歳、二十五歳、二十八歳まで伸びて、今に至る。

「人生は早い。特に私は。だから何でも早めに済ませておいた」

俺を産んだのが十三歳。大体今の俺と同じ年で俺を産んだ。

一回り年上の父と駆け落ち同然で結婚して、身体を強くする為に武術を嗜む母は子連れ武士娘として学園に通う波乱万丈で濃い人生を送った。

三か月後、今まで俺と共に武術を極め求めた母は、もういなかった。

最後の時まで俺と鍛錬をしていた。母が病室で寝ている最中でも、傍で母から見えるように。

俺は人生に絶望を感じていた。今まで辛い鍛錬やボコボコに殴られることはなくなったが、途轍(とてつ)もない喪失感が襲う。

そんな時、海外出張中の父である西園寺時隆(さいおんじ ときたか)から連絡が来た。

母が過ごした学園へ入学してみないか、と。

俺は悩みに悩みぬいて、準備を整えた。学園へ入学する準備を。

２００９年春――俺は川神学園へ入学を果たした。

PROLOGUE（後書き）

皆様初めまして、御手洗団子でございます。
来年一月発売まじこいＳに繋がるようにストーリー展開をします。
なので殆どがオリジナル展開で、たまに原作に介入します。
８：２ぐらいの割合でしょうか。
あとついでにヒロイン募集も致します。
原作ヒロインの〇〇〇をヒロインに！　オリジナルヒロインを考えたので良かったら使ってください！　など。
あと感想もお待ちしております
それでは次回お会い致しましょう。

第一話　人生二人目の敗北

四月五日の日曜日。入学式が明日に迫(せま)る本日夕方、俺は鍛錬兼川神学園へのルート確認の為ランニングをしている。

息が上がり、足が重く、脳がフワフワした感じになる。入学式が楽しみで結構飛ばし過ぎたかな？

それでも俺はスピードを緩めない。それよりスピードが速くなる。楽しみだ。母が人生で最も楽しんだ場所である川神学園でどのような出来事が起きるのか。

俺の自宅から全速力で走り続けて三十分。全速力で走って来たので汗がダラダラ、喉はカラカラ、足はガクガク、けれども俺は平常心を装い顔を上げたまま荒く空気を取り込む。しかし、ようやく川神学園前に到着した。

目の前には大きな門が立ち憚(はばか)って中の建物が見え辛い。残念。入試試験は試験直前まで教科書に目を通し、受験が終わったら頭が真っ白になり建物をよく見ていなかった。

今日はじっくり内装を見ようと思ったが、この分だと内装は明日のお楽しみ。今日は帰って飯作るか。

俺は学校の周りをジョギング程度のスピードで走りながら学校を観察。今日の観察で分かった事は、川神学園が普通の学校と比べて大きいという事だけ。他に特別凄い所は見当たらない。

一周走り終わった俺は川神学園の校門の前に立ち、これから通う学

び舎に一礼。

バッと顔を上げ川神学園に背を向け走り出そうとしたら、目の前に髪の長いお爺ちゃんがいた。

「ほう。中々良い目をしているのう。どこかで見た目じゃ」

この老人、見たことがあるというか、最近見た。学園のパンフレットで。ていうか、

「が、学長?!」

「そうじゃ。わしはそこの学園の学長を務める川神鉄心じゃ。君、新入生かのう?」

「はい。明日からこの学園に入学します、西園寺伸二です」

俺の名を聞いた直後、学長は合点がいった、ような表情を浮かべた。

「なるほどのう。彼女に似ていると思っていたのじゃが、君があやめの一人息子か」

ほっほっほっ。と突然笑う学長。

「学長、母を知っているんですか?」

「当たり前じゃ。十数年前の川神学院を牛耳っておった子連れ武士娘を知っていない方が可笑しいわい」

俺の耳にとんでもない情報が入って来た。母が、川神学園を、牛耳

っていた？

「ん？　なんじゃ、実の母の武勇伝を知らんのか」

「は、はい。恥ずかしながら、母から聞いておりませんでした」

「まあ、彼女は自分の強さを他人に見せびらかすような愚かな真似はせんからな。実の息子に教えんのも納得じゃ」

学長から聞くと、俺の母親はとんでもない有名人らしい。武道をしている者ならば、一度は聞く名前だと。

かの有名な武道四天王の内二人を一対一の戦いで葬り去ったと（実際には死んでいない）。他にも人を助けるために武術を極めていたと。

「……このぐらいかの。細かく言えば色々あるのじゃが、わしも忙しい身なのでな。この辺で失礼する」

「はい！　ありがとうございました！　これからよろしくお願いします！！」

学長は「ルーに良い土産話が出来た」と軽い足取りで学園内へ向かった。

俺は学長を見届けてから家へ帰る事にした。

俺は家でシャワーを浴びて汗を洗い落とす。家は一人暮らしのマン

ション住まいで、海外出張中の父からの少ない仕送りと日雇いバイトでなんとか生活費を賄(まかな)っている。

学生に大金は持たせられぬと父は毎月家賃と別に十万円の仕送りをしてくれる。実際十万円で生活費は足りるが、趣味のお金は自分で稼いでいる。必要な時に稼げるので日雇いが一番効率が良い。

浴室から自分の部屋へ戻ると、ケータイが震えた。メールが着信したようだ。

送り主は鈴木からだ。メールの内容は、とある女性に追われている。追い着かれるのは時間の問題、助けてくれと。

俺は一万円な、と返事を出すと、三秒後に返事が返ってきた。つーかマンションにチャイムが響き渡った。

『助けてくれ！　早く、早く開けないとアイツが来る！！』

仕方なくマンション一階の共用玄関を開いて、俺の部屋へ招き入れる。

鈴木は肩で息をしながらリビングで座り込んだ。

「た、助かったぜ伸二。しばらく匿(かくま)ってくれ」

「その前に一つ質問。誰に、どうして追われたんだ？」

「は、話さないと駄目か？」

「当たり前だ。前にお前が原因で俺まで補導されそうになったろ？」

鈴木は黙ってしまった。表情で分かる。こいつ、犯罪を犯して逃げて来たな。

「追っているのは誰だ？　警察？　それとも――」

「し、知らねえよ！　取引の最中、突然アイツが――」

「取引って、なんだ？」

やっちまったと鈴木が顔を俯(うつむ)かせた。どうやら本当に犯罪を犯したのか。

「チャンスをやる。ここからさっさと出て行け。でないとお前をぶん殴る」

「止めてくれ！　せめて、せめて警察を呼んでからにしてくれ！　アイツには、アイツにだけには捕まりたくねぇよ……」

泣きながら俺に警察を呼んでくれと頼みこむ鈴木。しょうがないから警察を呼ぶのに備え付け電話を取り、１１と押し、最後に０を押す瞬間、彼女が窓を突き破って入って来た。

「――き、きききききたーーーー！」

鈴木の前に、一言では言い表せない美女が毅然(きぜん)とした姿勢で立っている。

腰まで伸びた艶やかな髪、猛禽類を思わせる瞳を持ちながら、それを引き立てる各部分。モデル並みの身長とグラビアモデルにも負け

ない豊満なボディ。

俺は正直、見惚れていた。

鈴木を一蹴りで沈黙させる姿までが、まるで芸術品のような美しさを持つ女性。俺は彼女が俺に攻撃を仕掛けるまで見惚れていた。

「川神流無双正拳突き――――！！！」

見た感じぶっちゃけ速いストレートパンチだった。

俺は襲いかかって来た女性の手首を掴んで背負い投げに持って行った。

「！？」

女性は油断していたのか受け身を取らずに背中から落ちた。怪我はしていないだろうが、常人ならしばらく悶え苦しむ程の痛みを受けただろう。

「ほう。貴様やるな。ただのクズではなさそうだ」

いやまあ母から武術を習ったしなあ。これぐらいは当然だ。

「なんか誤解しているようだが、俺はそいつの仲間ではないぞ？」

「嘘を吐くな！　貴様が黒幕だと、他の仲間から情報は貰った。観念して粛清を受けるんだな！！」

いやいや。仲間って、俺一人も仲間だと思ってる奴いないし。

「オラオラオラ！！」

女性が先程のストレートパンチより若干遅いパンチの連打を仕掛ける。右頬、鳩尾、左わき腹などランダムにパンチが放たれる。俺は一つ一つ手の平で流すように連打を捌く。

連打のスピードを緩めずに突然右足が俺の顎を捉えたが、俺は紙一重で後方に避ける。

多分実力は俺より上。護りに徹しているので攻撃は避けられるが、攻撃の隙がほとんど無い。ま、例え攻撃が出来たとしても女性を殴ったりしないけど。これ母の遺言。女性はどんな理由でも暴力を振るうべからず。

「これを避けるか！　良いぞ良いぞ！！　血が沸いてくる！！」

女性は次々と多種多様な攻撃を仕掛けるが、俺には見える。だが身体が着いて来ない。段々精神と身体が引き離される。

一つ、また一つと軽いダメージを負う。これでは俺の根負けで最後には大ダメージを受けてしまう。逃げ出そうにもここは五階だ。玄関から逃げるにしても鍵を開けている間に女性の攻撃が来る。飛び降りるなんて以ての外。上手く飛び降りても足へのダメージで俺が動けなくなり、この女性が追って来てゲームオーバー。

「楽しかったぞ！　残念だが、これで終わりだ！！」

女性は俺との距離を置いて、力を溜める。

「はぁぁっ！！！　川神流奥義、紅色の波紋（ルビーオーバードライブ）！！」

俺の腹部を中心に女性の正拳の衝撃が、頭の先から指の先まで隅々まで行き渡る。

今日は初めて母以外の人物に負けた、クソったれな一日となった。

第一話　人生二人目の敗北（後書き）

今日テストなのに、何やってるんだろう、俺。
息抜きと言ってネトゲをやって数時間、終いにはプロローグだけで終わるはずが一話まで書いちまった。
まあ、赤点取らなければ良いやｗｗｗ
ではまた次回、更新の時にお会いしましょう！

第二話　入学式の朝（エロゲ展開あるよ！）

「久しぶりに他人の家で寝たなぁ」

俺は謎の女性に謎の必殺技を喰らって和風の部屋で寝ていた。

俺は記憶の中では初めてベッドじゃない布団で寝た。意外と寝心地が良い。それと畳にも匂いがあるんだな。結構良い匂いだ。

兎に角謎だらけだ。少なくとも、あの女性が川神流との関係があるという事だけだ。

腹部のダメージは、まだ癒えていない。こりゃあ完治まで数日かかるな。

だが動く事はできる。どこだか知らないが、さっさと家に帰るか。

あー、確か鈴木が逃げ込んだ所為で、俺が鈴木達の黒幕ってあの女性が思い込んでいるよな。

ここがもしあの女の自宅なら、逃げてもすぐに捕まるだろうな。

拘束が何一つされていないし、ドアも鍵が掛かって無い事からこの家の中は自由に動けるはず。

一先ず俺は着されていた浴衣を脱いで布団の横にある、俺の私服に着替える。ご丁寧に下着まで脱がされていた。

裸になってパンツに片足を入れた瞬間、障子がスーッと開かれた。

「君、起きた――――――」

「……」

……整理しよう。

障子の向こうにはポニーテールの可愛らしい少女がブルマ姿で立っていた。しかも薄ら汗で服が肌に張り付いて少し色っぽい。いや、胸が無いから全然色っぽくない。せめて謎の黒髪ロング女程の胸だったら良かったのに。

今気付いた。俺はポニーテールの彼女の前で裸だ。

彼女は俺の朝だから元気になった男のシンボルを凝視している。

「ぎゃあああああああああああ！！」←ポニーテール。

「キャーーーーーー！！」←俺。

俺は空気を読んで乳首と男のシンボルを隠す。しかし、大きくなったシンボルは俺の手で隠しきれない。

「エッチ！　この変態！　男の部屋に入る前はノックをしてって言ったでしょ！！」

男女逆転。俺はその場のノリだけでそう叫んだ。誰得だよ、俺の裸とか。

「どうした一子！　一体なにが――――」

なんという事でしょう。まさかあの謎の黒髪ロングの女性が来るとは思いもよりませんでした。

黒髪ロングの女性は右手に力を溜めるモーションを起こした。

「ちょっと待て！　俺はただ、着替えをしていただけ――――」

「ふんっ！」

俺の鳩尾に的確なストレートパンチを問答無用に叩きつける黒髪ロング女性。

「お姉さま、怖かったわ！」と涙を流して謎の女性に抱きつくポニーテール。

「貴様、まさか一子を襲うとはな」

「お、……おそ、って、ねえよ……。着替え…中に、とつぜ、んはいって……来たんだ」

うぇっ。胃液が喉から込み上がってくる。昨日の晩から何も食べてないのが救いだ。何とか逆流する胃液を抑(おさ)え込める。

「いいか、私達が出て行って1分以内に着替えろ。していなければ、あとは分かるな？」

そう言って二人は部屋から出て行った。

くっ、鳩尾殴られて力が入らない。それに空腹や昨日のダメージが

付いて上手く身体を動かせないのに、アイツ無茶な要求しやがって。せめて下だけでも着ないと、アイツに殺されかねない。

パンツズボンを履いて、上のシャツを着ている最中に一人、黒髪ロングのアイツが入って来た。

今度は何をされるかと身構(みがま)えてたら、彼女は大人しく俺の前で正座した。

「昨日はすまなかった。この通りだ」と頭を下げる。

「勘違いでお前とあの部屋をボロボロにしてしまったのは、反省している」

潔(いさぎよ)い。そして正直者。俺が彼女に感じた彼女の内面だ。

「いや、俺こそ犯罪者を匿っているような真似をしたんだ。疑われてもしょうがないよ」

「言い訳ではないが、私達は、あの鈴木達の罠にはまったんだ。君を黒幕に仕立て上げて、私や一子を君と戦わせて助けて貰う作戦だったらしい」

俺が寝ている合間に誤解が解けていて良かった。このまま鈴木達と道連れに逮捕なんてされたら堪(たま)らない。

「あの、鈴木達は何をしていたんです？」

「麻薬の密売だ。最近出始めたドラックのユートピアを密売してい

たのだ」

「麻薬って、鈴木達は今、」

「警察だな。今頃カツ丼でも食べてるんじゃないか」

はぁ。これで鈴木達のボディーガードのバイトは潰れたな。アイツ等クズだったけど、金の支払いは良かったのに。

「話を変えるが、君は近くに親戚の家や親しい友人は？」

「いや、いませんけど。どうしてです？」

彼女は実に申し訳ないという表情で、ある事実を告げる。

「昨日の私との戦いを憶えているか？」

「ああ。俺が防戦一方だったやつね」

「それで、マンションの修理期間が1カ月かかるんだ」

「修理？」

「憶えてないのか？　私の最後の攻撃で、リビングの壁や床の至る所にヒビができてしまったんだ」

マジか。つーか俺良く生きているな。

住む場所か、どうしよう。このままだと野宿決定だ。マンションを借りるにしても未成年者一人で借りれるのか？　保証人が必要なら

海外出張中の親父は無理。福島に住む叔父叔母を呼ぶしかなさそうだ。それでも叔父や叔母にだって用事があるんだ。すぐに来れる訳でもないし。

「君が良かったら、川神院に住まないか？」

「川神院、てあの川神院？」

「そうだ。私は川神百代（かわかみ　ももよ）。川神院のトップである川神鉄心の孫だ。君を期間限定の門下生として川神院に入るようにジジイには伝えておく」

成る程。俺が手も足も出なかった理由が分かった。話なら聞いた事がある。川神百代と云う最強の武神が川神市に存在すると。初めて肉眼で見た。ならばここは川神院のどこかの部屋か。

川神百代の言う通りここに住まわせて貰おうかな。親父から一カ月の家賃代を誤魔化（ごまか）せる。

「えっと、よろしくお願いします」

「ああ。よろしく。君の名前、聞いてもいいか？」

そういえば自己紹介がまだだったな。

「俺の名前は西園寺伸二（さいおんじ　しんじ）。川神学園一ね、ん……ああ！　百代さん！　今何時ですか？！」

「今は八時半頃だぞ」

「入学式は九時半だから、このままだと遅刻だ！　すいません！
俺学園に行ってきます！！」

俺は着の身着のまま川神院を飛び出した。

まずは家に帰って制服を取りに行かねば。流石に私服で登校は駄目だ。

て、

「靴(くつ)はどこだ！？　つーか川神院広っ！」

結局川神院を出たのが九時前。家に戻って着替えるので九時十五分。
川神学園へ着く頃には既に十時を回っていたとさ。

第二話　入学式の朝（エロゲ展開あるよ！）（後書き）

テストの手応えを全く感じなかった御手洗団子です。
もう寝不足で私の頭も狂っていたんでしょう。
数学テスト前の休み時間、私は誰かクラスメイトを道連れにしようと決心してました。
数学の公式を暗記しているＩ君の耳元で、『このー木、なんの木、気になる木♪』と歌ってやりました。
案の定、私が思い出し笑いをして、試験監督の先生に殴られました。
つられてＩ君も笑って結果オーライでした。
では、次回の更新の際にお会いしましょう！

第三話　眠れる河川敷のお姉さん　Ｐａｒｔ１

諦めた。だって入学式の途中で割り込む勇気はない。

だからと言って川神院に戻るにしても、気まずいだろう。しょうがないので多摩川の河川敷をコンビニで買ったパンを頬張(ほおば)りながら一人トボトボ歩く。

初めて多摩川の河川敷に来たが、中々の広さだ。鍛錬をするには持ってっこいだな。今度からここを拠点に鍛錬を積むか。

河川敷を海側に向かって歩く。

しばらくすると、一人の女性が倒れていた。

行き倒れか、と女性に駆け寄る。

女性の顔を覗き込むと、行き倒れでも何でも無く、ただ寝ていた。

女性が無事なのを確認して安堵(あんど)の溜息を吐く。

それにしても、この女性は身長や胸や尻など色々と大きいな。身長は俺より若干大きいかな？

……ま、まだまだ俺は成長途中だし！　すぐに追い抜くさ！

このお姉さん、幸せそうに寝ているな。俺も百代さんから受けたダメージと疲労で眠い。パンを食べてある程度腹も膨(ふく)れたし、俺も寝るか。

お姉さんから数m離れた場所で俺も横になる。

背中は草でチクチクするが、それ程不快にはならない。むしろ太陽の温かさと時折(ときおり)吹く風が心地よく、俺の眠気を刺激する。

視界の隅で黒い物体が動いた。目線を移動すると、黒猫が俺に擦り寄って来た。

俺は何の抵抗もしないでいると、黒猫は俺の腹の上によじ登った。平然と俺の腹の上で丸くなる。黒猫は絶好のベッドを見つけたようだ。

俺も黒猫に続いて深い眠りに落ちた。

腹が少し動いた。

どうやら黒猫が目を覚ましたようだ。

俺も薄く着いた目脂(めやに)を擦(こす)り落とす。

ちょっとした違和感が俺を襲う。寝る前は草でチクチクした頭の裏が柔らかい感触に包まれていた。

目を開けると、俺の隣で寝ていたお姉さんが、俺を膝枕(ひざまくら)して寝ていた。

「……えっ?!」

驚いた。二重の意味で驚いた。

まず一つは他人である俺を膝枕する事、もう一つはその状態で寝ている事だ。この状態でよく眠れるな。

「Ｚｚｚ　Ｚｚｚ」

こんな体制で寝られるな。ていうか顔が近い！

良く見ればお姉さんは結構な美人だ。途端に心臓の鼓動が速くなる。今まで女性にこれ程の至近距離で触れられることは無かった。当然の反応だよな？

どれほど時間が経ったであろう。数分か、或(ある)いは一時間以上俺も二度寝をしていた。

不意に頭を撫でられる。目を覚ますと、さっきのお姉さんが幸せそうな顔で俺を良い子良い子してた。妙(みょう)に照れくさい。

「や」

「……おはようございます」

俺が起きてるのが分かると、頭から手をどけた。

「ごめんね。勝手に膝枕しちゃって」

「いえ、別に大丈夫ですよ。俺も気持ち良く眠れたし」

「そう？　ならよかったぁ」

そういいまた俺の頭を撫で回す。

「うふふ」

「？　何が可笑しいんですか？」

「いやぁ、君みたいに大人しくて可愛い弟が欲しいなぁ、と思って」

年上と思われる女性に、可愛いと言われたのは初めてだ。可愛いと言われたのに、全然嫌じゃない。むしろもっと言われたくなる。

「ウチの弟って、ヤンチャでそんなに年離れてないからさぁ。君ぐらい年下で可愛い弟が良か……Ｚｚｚ」

って、寝てるし。俺の頭が女性の手でロックされてる。これでは動けない。……いや、この女性の力が強くて離れるにも離れられない。母と百代さん、それにこのお姉さんといい、知らない間に日本の男女の力が逆転したのか？

「……んあ、ごめんごめん。これじゃあ帰れないよね」

はい、と頭から手を放すお姉さん。このまま寝るわけにもいかないので体を起こす。

「ここって、良い場所だよね。昼寝には最適だよ～」

「そうですね。俺も良いと思います」

「芝生(しばふ)が布団代わりになってねえ……」

そう言ってまた瞳を閉じるお姉さん。どんだけ眠いんだよ。

「……げっ、もう3時半かよ」

軽く五時間も俺とお姉さんは寝ていたのか。お姉さんに至ってはそれ以上だな。

「もう行くの？」

「起きてるのか寝ているのかハッキリしてください……」

正直このお姉さんの思考回路が分からん。会話をしたいなら起きろ。寝たいなら寝ろ。

「お腹が空いたんで俺は帰ります」

「そう。私はもう少し寝るね。また会おうね」

「はい。また会いましょ、……もう寝てる。」

お姉さんは豪快に大の字で睡眠を始めた。今度こそ本当に寝ただろう。

俺は遅めの昼飯を食べに繁華街へ向かう。

第三話　眠れる河川敷のお姉さん　Ｐａｒｔ１（後書き）

タイトルにＰａｒｔ１と入れましたが、次の更新には続きません。

名前は敢えて出しませんでしたが、板垣辰子の登場回です。

にじファンで板垣辰子の検索結果が０で驚きでした。

にじファンのまじこい作者は辰子があまり好きではないのですかね。

では次回、『伸二、初めての川神学園（仮）』でお会いしましょう！！

第四話　百代の罰と報い

勘違いで伸二の家をボロボロにしてしまった次の日の夜、川神百代は祖父である川神鉄心に呼び出されていた。

「モモよ。お主、一般人に暴力を振るったな？」

「はい、申し訳無く思っています」

普段は鉄心の前では高圧的な態度を取る百代だが、今夜は違う。百代も自分で犯した罪を認識しているのだ。

「いくら敵の誤情報に振り回されたとしても、例え罪人に奥義を使うのはやり過ぎじゃ。しかも誤って何の罪も無い一般人に奥義なぞ言語道断。反省せい」

「はい。彼の家の修理代は、私が払います」

「そんなの当たり前じゃ！　それだけでは罪滅ぼしにすらならん。一つ聞くが、何故（なぜ）奥義を使った、いや使わざる追えなかった？」

「最初は奥義を使用するつもりは在りませんでした。しかし、彼が想像以上に強かったのでテンションが上がり、彼を確実に倒すには川神流奥義しか無いと思っていました」

「奥義を使わなくとも、お主の力量（りきりょう）なら使わなくとも勝てただろう？」

「はい、その通りです。言い訳するつもりは在りません」

鉄心は大きなため息を吐き、ツルツルな頭を一掻き二掻きする。鉄心の口から、百代にとって衝撃的な言葉が発せられる。

「川神百代。本日この時間を以(も)って、西園寺伸二の家が修繕(しゅうぜん)されるまで、一切の戦いを禁ずる」

「なっ？！　そんな！」

「勿論挑戦者が来たとしても、話すな、目を合わせるな、触れるな、戦うな。これは絶対じゃ」

百代は驚愕した。ある程度の罰は予測していたが、まさか戦いを禁止されるとは予想になかった。精々修理費だけを出しとけば問題無いと、そんな軽い考えをしていた。

「今後の登下校の際はルーを監視役にする。挑戦者はルーに相手になってもらう。場合によってはワシも相手をする」

驚く百代を余所(よそ)に、鉄心は更に厳しい条件を増やす。

「修理代も、己(おのれ)が働いた金で出すように。他人から借りた金を使ってもいかん」

「……くっ、わかった」

「これらの条件を修理終了、つまり一か月後までに全て完了しなかった場合、お主の力を封じる。覚悟しておけ」

「力を、封じる……」

百代は聞いた事がある。昔、川神院師範代で百代の師匠であった釈迦堂刑部という禍々しい力を持った者を、破門の際に悪行へ力を使わせないために、鉄心は釈迦堂の力を封印しようとしたが、寸でのところで川神院を逃げ出したと。

「今後は良く考えて行動するように。あと最後に。伸二に伸二が納得する罪滅ぼしを自分で考え、自分で行うように。これも前の約束の期限以内に達成しなければ、やはりお主の力を封印する」

百代は苦虫を潰したような表情を見せるが、反論することはできないので全ての条件を承諾した。

「先に言っておくが、伸二に直接聞くのも駄目じゃ。自分で考え、誠意を込めて、伸二が納得する罪滅ぼしを考えよ。不正なぞ伸二やお主の親しい仲間に訊けば丸解りじゃ」

何も言い返さずに「失礼します」と百代は悔しそうに鉄心の部屋を後にする。

「……まさか百代に奥義を使わせるとわ。しかも二日でほぼ完治させる身体能力。末恐ろしいのう、あやめの息子は。いやはや流石と言った所か」

ほっほっほ、と鉄心の笑い声が部屋に響いた。

「十年前と同じよう、現代でも西園寺家の血を周囲に振る舞うのかのう。以前のあやめのように」

第四話　百代の罰と報い（後書き）

投稿された駄目だしを参考にして書き加えました。
この話は続きます。

第五話　不良Ｓの悲劇

川神院は結構過ごし易(やす)い。お風呂もデカくてゆっくり入れるし、飯も美味い。

晩御飯を食べ終えて三十分後、俺は青色が主体のアディダスジャージを着用。これが俺の鍛錬着。何故アディダスかって、デザインが気に入ったから。

川神院の玄関先で足を中心に入念なストレッチを行(おこな)う。

ストレッチが終わり、最初はジョギング程度のスピードで走る。徐々に走るスピードが速くなる。足が温まって来た。このままノンストップで多摩川まで走り続ける。

多摩川に着くと、先客がいるようだ。遠くて暗いのでシルエットでしか見えない。なにやら細長い棒、槍を振り回している。

いや、槍は綺麗な弧を描きながら宙を舞っている。使い手は中々の槍使いだ。

俺は槍使いが気になったが、鍛錬を始める事にした。

腕立て伏せ、腹筋、河川敷階段ダッシュ、逆立ちで歩いたりして身体全体の筋肉を刺激する。

一通り体を虐(いじ)めてから、母から習った武術の型を確認する。

ある程度(ていど)疲れた状態で型を確認しないと実践では役に立たない。疲

れている時は勿論、怪我をしてても技を繰り出せないのは敗北したと同じだ。これはスポーツ全般に言える。

ラグビーが良い例だ。ラガーマンは尊敬に値するスポーツマンだ。プロ選手は例え足の靭帯（じんたい）は伸びた程度ではテーピングをして試合に出たり、骨折して痛みを堪えながら試合をする人だって普通にいる。

俺は一通りの型を確認し終えてから帰路についた。

翌日、俺は初めての川神学園登校して、自分のクラスである１－Ｃに向かっていた。

Ｃクラスに入るまで周囲からの視線を感じた。俺の姿を見て友達とヒソヒソ声で会話したり、道を塞ぐように向かい側から歩いてきた男子三人組は俺の姿を認識すると三人は散り散りになって道を譲った。

俺を不良か何かと勘違いをしているのか？

その答えは学園の掲示板で明らかになった。

Ｃクラスに着いても、俺の半径２ｍ以内にまったく入って来ようとしないクラスメイト。完全に孤立した。

俺は暇だったのでケータイで気紛れに川神学園の掲示板を検索。

『川神学園』『掲示板』で検索結果の一番上に『川神学園専用掲示

板』が表示された。

そのサイトを開いてスレッド一覧を確認すると、一つ気になるスレッドを発見。

タイトルは『川神百代と互角に渡り合った不良Ｓ　ｐａｒｔ２』。

俺は迷わずその掲示板へジャンプ。

そこにはある事ない事が書かれていた。

『川神百代が不良Ｓが戦ったって本当かよ！　しかも互角だったらしいじゃないか？！』

『百代さんの奥義を喰らっても意識は保っていたらしい』

『しかも奥義を発動しなければ負けてたってよ』

『うわ化け物ジャン！』

『気性も荒いから怒らせると日常生活に障害が残る怪我を負わせられる』

『そのＳは麻薬の密売組織のリーダーだって』

『しかも警察はそのＳの証拠を発見できなくてタイーホできない』

『Ｓは川神学園の１－Ｃ所属らしい』

『私Ｃクラスだけど、そのＳは怪我で休みだって』

『学校も疑わしいだけじゃあ退学にできないとよ』

ここまでが昨日までの書き込み。

なんだこれ。ほとんどが嘘で溢れてやがる。百代さんの完全試合だったのに、まるで俺が百代さん並の化け物じゃないか。

それでこっからが今日の書き込み。

『Sが登校してきた！　でも意外と外見は普通じゃね？』
『バカ！　それは仮の姿に決まってるだろ！　川神百代が学園いるから派手に行動できないんだ！』
『俺今Cクラスから実況するわｗｗｗ　今Sはケータイでどっかのサイトにアクセス中ｗｗｗ』
『止めろスネーク！　危険すぐる！』『スネーク、バレたら殺されるぞ？』
『皆ビビりすぎｗｗｗｗｗ　俺余裕だからケータイ覗きに行くわｗｗｗｗｗｗ』
『今なら間に合うからやめろ！！』
『ちょｗｗｗ　お前らビビるなよｗｗｗｗ　こっちまで不安になるｗｗｗｗ　今Sの後ろｗｗｗｗ　バカだから俺に気付いてないｗｗｗｗｗｗ』

『この掲示板覗きこんでますけど？　ｂｙS』

俺は背後を振り返ると、ケータイ片手のシルバーアクセを財布にジャラジャラつけた茶髪ツンツン頭の、所謂チャラ男が不自然に机から身を乗り出していた。チャラ男はカチカチカチと歯を震わせる。

「言っとくけど、この掲示板は嘘――――」

「ひゃあぁ！！　こ、こここここ、こ、こ、ｋろしゃにゃいしぇぇええぇ！！！！」

チャラ男は突然奇声を上げて一回転びそうになりながら教室を飛び出した。いや逃げ出した。

掲示板がヒートアップ。

『本人キターーーーーーーーーーーーーー！！！！！』
『あのスネーク、逝ったな』
『Ｃから凄い形相で逃げてたったｗｗｗ　ワロスｗｗｗｗ』
『怖ぇ……。Ｓが一言何か言ったらスネークが突然逃げ出した……』
『やっぱり噂は本当だったのか』
『僕同じ学年じゃなくて良かったよ』
『レス数が１０００を超えています。残念ながらこれ以上は書き込めません。』

クラス全体に緊張が走る。俺が弁解しようと視線を一人の男子生徒に合わせたが、

「チョット俺の話を聞け！」

「ひいぃ！！」

男はとても怯えた様子で直立不動になった。

「お前等は勘違いしている！　良く聞け！　俺は麻薬組織の、」

ジョボ、ジョボジョボジョボ。

男は恐怖のあまり足下が崩れて地面に座り込む。黄色い液体が男子生徒のズボンを浸食し、やがて男子生徒の周りに黄色い液体の水溜りができた。男子生徒は白目を剥いて気絶した。それを見た女子生徒数名が涙を浮かばせて肩を震わせていた。

漏らした男子生徒は俺にも責任があったので、尿が服に付かないように肩に担いで保健室へ運んだ。

こうして、俺の噂が学園中に広がった。

『恐怖の大王西園寺伸二は一言で人の精神を崩壊させることが出来る。

登校初日で気に入らないCクラス男子二人の精神を破壊した。

そのうちの一人を保健室に連れて行って、男子生徒の純潔を奪った』

いつの間にか俺がホモ扱いになってワロタ……。

第一回　ＬＯＶＥかわかみ

『ハァイエブリバディ、春と言えば保育園や幼稚園、そして小学校に小さな少女が入学するとても素晴らしい季節だね。今週もＬＯＶＥかわかみがはじまるよー。パーソナリティは２－Ｓでスキンヘッドがトレードマークの井上準』

『人生、百花繚乱酒池肉林。３－Ｆの川神百代だ』

『まずは新入生の皆さん入学おめでとうございます。このラジオは百代さんに悩み相談する質問バラエティ。詳しくは学園掲示板を見てね。さて百代さん、今日もメールが沢山来てますよ』

『そうか』

『そうかってあっけないですね～。主に貴方と戦った不良Ｓについての質問ですよ？』

『ああ。伸二の事か』

『ちょっと、気を使ってイニシャルで呼んだのに本名言いますか！？』

『どーでもいいだろ。さっさとメールを読め』

『人使いが荒い先輩ですね。さて、本日最初のメールです。『百代さん、Ｓ君が奥義を喰らっても意識を保っていたのは本当ですか？』』

『本当だが、そのあと手刀で眠らせた』

『すごい怪物が一年に現れましたね～。じゃあ次の質問。『噂のSは川神学園でどれぐらいの強さですか？』これ俺も気になります。百代さんの奥義を喰らっても生きて登校しているって事は相当強いでしょう？』

『そうだな。川神学園の生徒の中でなら、男子は圧勝するが、一部女子には勝てないだろ』

『そうですか。最近の女性は強いですからね。特に百代さんが。次行きましょう『S君が怖くて一年全体の空気が重いです。どうにかなりませんか？』そういえば今日の一年は、お通夜状態でしたね』

『その事なら大丈夫だ。あいつは無闇やたらと暴れないからな。もし暴れたら私が粛清しよう。ま、暴れたりはしないだろうが』

『心強い言葉ありがとうございます！　次の質問、『僕の彼女が照れていて画面から出てきません。彼女が出てくる何か良い方法ありませんか？』……答えますか？』

『そもそも私の存在自体が画面のなk――』

『はい、メタ発言はやめましょう。ちなみに画面の中から女性は出てきません。現実を見て、三次元（りある）で女性に恋しなさい』

『なあハゲ。今日の質問詰まらないぞ』

『仕方ないですよ。百代さんと渡り合った一年の話題で持ち切りなんですから』

『もっとこう、血が沸く話が無いか？』

『そんなものあるわけ、……新着で面白いメールが来ました。『純さん百代さん初めまして。何やら１－Ｓ女子の武蔵小杉（むさしこすぎ）と西園寺伸二が決闘するようです。どちらが勝つと思いますか？』百代さん、勿論勝つのは』

『武蔵だな』

『そう武蔵が勝つよねって、ええ！！　嘘ですよね！？』

『スポーツやトランプならどちらが勝つか分からんが、試合なら確実に武蔵だ』

『あ、もしかして西園寺は川神流奥義を喰らった反動で本来の力を発揮できないとか？』

『いや、そもそも伸二は武蔵を相手に勝負しないだろう』

『――おっと。早速決闘の結果が届きました。どうやら西園寺は決闘を受けなかったようです。百代さんの予測通りです。去り際に武蔵から玉無しと言われ、西園寺は振り向いて視線だけで黙らせたようです。本当に怖い一年が入学しましたね』

『私にとっては可愛いけどな』

『百代さんと俺達一般市民を一緒にしないでください！　百代さんから見れば俺たち学生全員可愛いでしょうが！！』

『おいハゲ。もう時間じゃないか？』

『おっとそうですね。それでは来週、この時間にお会いしましょう。パーソナリティは井上準と』

『川神百代がお送りした』

『それでは良い午後の授業を！！』

第六話　風を翔る少年との出会い

なんつーか友達が出来ない。

クラスメイトどころか担任の新任女性教師も俺の噂に惑わされて、Cクラスは黙々と授業が進む。まるで特進クラスのようにチョークと鉛筆の無機質な音と、担当の先生の震える声が教室に響く。随分寂しい授業だ

昼休みになって俺が教室に残ると、他の人は教室から出て行き、逆に俺が出て行くとクラスメイトが教室に戻る。

仕方が無いので、俺は屋上で一人寂しく弁当を食おうとした。

二階へ続く階段の途中、不意に後方から俺を呼ぶ声が聞こえた。

振り向いたが誰もいない。聞き間違いか、ともう一歩階段を上がると女性の声が聞こえた。

「西園寺伸二！」

うん、間違いない。俺を呼んでいる。もう一度振り返ると体操着姿の女子が立っていた。

そういえば川神学園は体操着がブルマだったな。……もしも俺がブルマを履きながら体育の授業を受けたらどうなる？　クラスは爆笑の渦に包まれて、俺は晴れてクラスメイトにお茶目なキャラとして見てくれるんじゃないか？

よし、ブルマを買おう！！

俺は購買部に自分に合うブルマを探しに行こうとするが、

「ちょっと待ちなさい！　プレミアムな私を無視しないでくれる？」

いや待てよ。昼休みに堂々とブルマを買ったら変態扱いされないか？　ここは放課後の誰もいない時間に買うのが一番ベストだろう。

「だから無視するな！！」

なんか変な女子が殴って来たけど、遅い。百代さんと比べると月とスッポン以上の差。速さも力も、特にセンスが感じられない。

「中々やるわね。私のプレミアムなパンチを避けるなんて。」

「……で、何？　俺を社会の底辺みたいな目で見ちゃって。怨(うら)みでもあるの？」

「あら、気づいていたの？　そうよ。私は貴方みたいな社会のクズがこの学園にいる事に我慢ならないの」

面倒くせえな。俺はこれからその誤解を解こうと考えているのに、そんな学園に相応しくないみたいな言い方は無いだろ。

「我慢ならないなら俺をどうしたいの？」

「貴方に決闘を申し込むわ！！」

いつの間にか周りを囲んでいたギャラリーが騒ぎ出す。ブルマ姿の

女子が川神学園の象徴である竜が描かれているワッペンを叩きつける。

「私の名前は武蔵小杉。貴方を倒すプレミアムな者の名前よ！　負けたらここを出て行ってくれる？」

「別に良いけど。ちなみに決闘の内容は？」

決闘と言っても内容は様々。実際にバーリトゥードゥでの勝負は勿論のこと、勝負であれば何でも良い。料理、スポーツ、チェス、賭け、歌唱力でも何でもだ。学園側が認めれば極論、殺し合いでもＯＫ。まあ学園側から容認されればの話だが。

「素手で勝負よ。どちらかが負けを認めるまで勝負を、「断る」

何言ってんだ、この女。武蔵っつったか。百代さんほどの強さがある訳でもないのに、俺と勝負？　だからと言ってどんなに強かろうと弱かろうと女子と戦う気は無い。前にも言ったが、これは母からの遺言の一つだ。

「断るって、まさかビビってるの？　私に負けて学園を去りたくないから断るの？　傑作だわ！！」

まあ何とでも言え。俺はそんな勝負よりも、どうすればＣクラスの皆と仲良くなれるか考えているんだからさ。

「これからは『玉無しの伸二』とでも名乗りなさいよ。『玉無し』」

これは寛容（かんよう）さがオカン級の俺でも怒ってしまう言葉だ。女子と勝負しないだけで玉無し？　元から玉ねえお前に言われる筋合（すじあ）いはねえ

よ！！

「お前、うっせえよ」

武蔵に聞こえるように、そう囁いた。俺の顔を見た武蔵は低レベルな挑発を止め、押し黙ってしまった。気丈な態度を続けて取るが、顔には恐怖の表情が浮かび上がる。

不良にも良く使った手だ。大抵人っていうのは、本来の実力とは関係無しに見た目で相手の実力を測ろうとする。だから怒りの表情で相手を怖がらせれば、こいつは強いだの自分より格上など勝手に妄想してくれる。なので俺は日頃威嚇用に、相手を怖がらせる顔を練習し取得した。

俺は誰もいない屋上を目指した。

屋上には先客がいた。

赤いバンダナを頭に巻いた男性が寝ていた。しかも涎の痕が頬にあった。一体どれぐらい寝ていたんだ？

しかし、ここ以外で昼飯を食べる場所は無いので、俺は屋上に設置してあるベンチでコンビニ弁当を食い始めた。

弁当を開けたと同時に寝ていたバンダナ男が目覚めた。んで、俺の弁当を食い入るように見つめ始めた。

「美味そうな弁当だなぁ」

と言ったと同時に腹の鳴る音が辺りに響き渡った。どうやら腹が減っているらしい。

屋上で堂々と寝ていることから、この男は多分学年が上のはずだ。しかも俺の姿を見て逃げ出さないし。これはこの男と友情を深められるチャンスだ！

「良かったら食うか？」

「良いのか！？」

「ああ。腹減ってんだろ？　今日は弁当を二つ勝ったから一つ食って良いぞ」

コンビニ弁当一つだけだと俺は腹が減るので、常に二つ以上の弁当を買う。

「それじゃ、遠慮なく貰うぜ！」

もう一つの弁当をバンダナに渡して、雑談をしながら食べる。

「そういやお前、伸二だよな？」

「そうだけど、何か？」

「やっぱりな。モモ先輩が担がれてたのをチラッと見てな」

モモ先輩、まあ普通に考えて百代さんだよな。この男、百代さんの知り合いか？

「あの時はすまなかったな。敵さんにまんまと嵌(は)められて、お前を傷つけちまって」

「そうか。お前もあの麻薬事件を一掃したメンバーの一人か」

「ああ。自己紹介がまだだったな。俺の名前は風間翔一(かざましょういち)。一応、風間ファミリーのリーダーをしている」

「また安直な名前だな」

「ま、小学生が決めた名前なんてこんなもんだろ。確かワン子とモモ先輩とは会ったんだよな」

ワン子……ああ、一子先輩の事か。一だからワンね。ある意味衝撃的な出会いだったな。まるでエロゲの展開だったし。

「他のメンバーに会ったか？」

「いや。風間と一子先輩と百代さんだけだ」

「そうか。なら今度の金曜日に、この前のお詫びを兼ねて来て欲しい場所がある」

「別に構わない。けど、お詫びなんて悪い。あの件は俺にも責任があるし、今は川神院に下宿させて貰っているから逆にこっちが悪い気分になる」

それを聞いた風間は、ニッと笑った。まるでイタズラ小僧が何か面白い事を思い浮かべたように。

「お前、気に入った！　絶対に金曜日にあそこに連れて行ってやる！！　楽しみにしていろよ！！！」

風間は残っていた弁当を口の中に捻じ込んで立ち上がる。

「それじゃ、ごっそさん！！」

そして風間は文字通り風のように駆け出して屋上から去った。まるで子供をそのまま大きくしたような奴だが、不思議な魅力がある。言葉では表せない、なにかこう、俺の心の隙間に入り込んで、風間が気に入ってしまった。たった一度の雑談で、俺は風間を好きになってしまった。

午後の授業が始まる鐘と共に、俺も屋上から姿を消した。

第六話　風を翔る少年との出会い（後書き）

こんばっぱー。餡子餅を食べると無条件に吐き出す御手洗団子どぇーっす。
面接練習が辛い！　予備校の先生にキツイ言葉をもらって、落ちこんでます。
元から俺は人見知りが激しいっちゅうねん！　関西人みたくベラベラ離せないっちゅーの！
試験管だけなら兎も角、他の生徒がいるのは反則だ！　俺を鬱にさせる気か！

ということで、今回は風間登場です。
相変わらず展開が遅いです。ヒロインとの絡みがここまで無いまじこい二次創作はあっただろうか？
まあいいや。自分のペースで進めて行きますので、どうか今後ともよろしゅうお願いしますわ。

第七話　友達できない同士（前書き）

第四話に割り込み投稿をしましたので、見ていない人は見てください。

第七話　友達できない同士

ブルマは止めだ。思いつきで買おうと思ったが、なんと購買部の店員が若い女性だった。

おばちゃん相手にだったら買えるけど、流石に同年代程の、しかも結構好みの女性の前ではブルマを買う事しかできない。

川神院に帰る途中、百代さんとバッタリ会った。

「よう伸二」

「どうも」

「丁度よかった。伸二にちょっと聞きたい事が……――やっぱり何でもない。気を付けて帰れよ」

百代さんは俺を見た瞬間、何か言いかけたが結局何も言わずに去って行った。なんだったのだろう。

しかし友達がいないのは辛いな。中学は母さんと鍛錬の毎日で、結局不良の知り合いしかいなかった。やっぱり人付き合いが大切なんだな。改めて実感した。

取り敢えずブルマで笑いを取る案は保留。違う作戦を考えなければならない。何が良いか。

腕を組んで考える。例えば川神学園の生徒が不良に絡まれて、俺が助けて俺の評価が上がる、なんて漫画展開にならんもんかね。クラ

スメイトは授業以外俺の半径３ｍには絶対入らんし、教室を出れば廊下がガランとなるし。話す切っ掛けが少ない。

……そういえば一人だけ俺が隣の席であるのにも拘(かかわ)らず、逃げ出さなかった女生徒が一人いたな。

綺麗な黒緑の長い髪を左右に一つずつ縛った髪、安産型で形の良い尻、同じ一年生とは思えない発育の良い身体。そして極めつけは刀を持っている事だ。本物らしい。名前は確か、黛由紀江(まゆずゆきえ)だ。

何故あの娘は俺を避けなかったのか分からない。授業間の１０分の休み時間も、一人で授業の準備をして椅子に座って待機。他の連中は素早く教室から逃げ出すと言うのに。

もしかして黛も、俺と同じで友達がいないのか？

これはラッキーかもしれん。同じ友達がいない相手なら話題も作れるし、何よりも俺を避けない。これ程良い話し相手はいない。

早速明日話しかけてみるとしよう。相手は女子だが文句は言うまい。出来れば男子の友達が欲しかったけど。

と、早速明日話しかけようと思った矢先に、俺の直進２０ｍ先に刀を持ったクラスメイトが一人で下校していた。これは、チャンス！！

「へい、黛！　ちょっと話しようぜっ☆」

スマン。俺は変なテンションになって、黛にナンパみたいに喋りかけちまった。

「わ、わわわわ私ですか！！」

案の定、黛はビックリしているようだ。

「うん、まあ君しかいないんだけど」

俺の言葉に釣られて左右見渡して、自分しかいないのを確認すると、突然黒い馬を模したストラップを取り出した。

「やったなまゆっち！　こいつはクラスメイトの伸二じゃねえか！　向こうから話しかけてくるチャンスなんて滅多にないぞ！！」

「はい、松風！　このチャンスを生かします！！」

腹話術で、ストラップと会話、だと？

この娘、どんだけ寂しい奴なんだ。なんか、塩水が目から溢れてきやがる。

「さ、西園寺さん！　お話しとはなんですか！」

メッチャ俺を睨んでる。口の端を目一杯上げて笑顔を無理に作ろうとするが、逆に怒っているように見える。

「いや、黛って、友達いないよね？」

なんか黛の顔の所為で、俺にも変な緊張が走る。

「良かったら同じクラスだし、メル友になってくれないかなぁ、て」

俺の友達という言葉に敏感に反応する黛。またもやストラップを取り出した。

「ど、どうしましょう、松風！　わ、私、こんな時、何て言えば分からなくて！！」

「落ち着けまゆっち！　これは大大大チャンスだ！！　これを逃したら一生友達が出来ないぜ！！」

「はい！　粉骨砕身頑張った友達作りの努力を無にしない為に、ここで成果を出します！！」

「その意気だぜ、まゆっち！！」

どうやら一人会議が終わったようで、素早くストラップを元の位置に戻した。

「わ、わわわ、私で良かったら、喜んで！！」

ストラップと喋っている素の方が可愛いのに、対人になると酷い顔になるな。しかもストラップとの会話の声が大きくて、話している内容が筒抜けだ。

「それじゃあ、俺のメアド赤外線で送るから」

「は、はい！　ちょっと待っててください！！」

ケータイを取り出して赤外線通信の準備を始めるが、黛の方は何だかもたついている。

「あ、あれ？　赤外線ってこっち、ああ違う！！　じゃ、じゃあこっちかな？　こ、こっちでもない！！」

どうやらケータイの扱い方が分からないようだ。１０分ほどしても一向に見つからないので、黛のケータイを借りた。

「ちょっと貸して」

「あ、は、はい」

一体どこにあるのかと探し始めて数秒、メニューボタンからツールの中に赤外線通信があった。その後俺のアドレスを黛のケータイへ送った。

「はい、これでオッケー。俺のケータイに空メール送って」

「わ、わかりました」

今度は少し戸惑ったようだが、無事俺の元へ黛の空メールが送られた。するとまた黛はストラップを取り出した。

「やりましたよ、松風！　初めて家族以外のメアドを手に入れました！！」

「やったぜ、まゆっち！　これも人形相手に練習したお蔭だな！！」

「はい！　毎日１００回練習した一つの成果ですね！！」

「でも、これで満足しちゃいけねえ。今はメル友ゲットできたから、次は普通に遊ぶ友達をゲットだ！」

「はい！　これから西園寺さんとの距離を縮められるよう頑張ります！！」

なんだか一人で盛り上がっているが大丈夫か？　ちょっと話に混ざってみよう。

「黛、一体このストラップはなんだ？」

「はうっ！？」

驚いて数歩俺から離れる黛。まさかストラップと喋っているのがバレてないとでも思っていたのか？

「こ、こここれはその、あの、――失礼します！！」

恥ずかしさのあまり突然走り出して逃げた。しかし、あの黛って子、身のこなしが良いな。あれだけのスピードを維持して約１００ｍは走りきったぞ。陸上選手のスプリント並だ。

この川神には俺の知っている可愛くてお淑(しと)やかで、か弱い女性は一人もいないのか？

改めて川神市の女性は凄いと感じた一日だ。

第七話　友達できない同士（後書き）

面接がやっと今日終わりましたよ。一つがね。

あともう一つ、十一月の頭にあるので、これからもたまーに更新されない日が出て来ます

本当好きに毎日更新したい！！

第八話　はじめての金曜集会　其の一

戦いたい。

いつからだろう。私の欲望を抑えられなくなったのは。

戦いたい戦いたい。

心の底から、いや心に絡(から)まった戦闘意欲が次第に心までも侵略を始める。心が染まる。

戦いたい戦いたい戦いたい戦いたい。

私と渡り合える、丈夫で強くて私を理解する強者に会って、この内に秘めた欲望を曝(さら)け出しながら、

戦いたい。

勝負戦争決闘決戦決勝闘争試合死合死闘。兎に角、拳をぶつけて、脚で蹴って、頭突いて、最後には殺し合いで死にたい。

それが私の夢。

それが私の正体。

それが私の欲望。

それが私の本望。

それが私の本質

それが私の本性。

世間なんてどうでも良い。仲間なんてどうでも良い。家族なんてどうでも良い。ただ私は、戦いたいんだ。

たとえ私が人間になれなくとも。

獣になっても。

そして、人間に戻れなくても、私は戦いたい。

今日で五日だ。

戦わなくなってたった五日だ。

確かに私が犯した罪の罰だ。だが、それで一カ月も戦うのを禁じるのは、私には厳しすぎる。

身体が疼く。

私が収(おさ)めている衝動が日が経つに連れて、疼(うず)いて蠢(うごめ)いて暴れて最後には、私の殻(りせい)を突き破る。

誰でも良い。

この衝動を抑えてくれるなら、誰だって良い。

私を、助けてくれ……。

四月十日金曜朝。俺は気持ちの良い朝を迎えていた。

天気は晴れ、今日一日降水確率０％。絶好の登校日和だ！

ま、勿論未だ学校行っても話せる相手は３人しかいないけど。

百代さんと風間とまゆっちだ。意外と前者の二人と喋ってるお蔭で、他の生徒が俺への警戒心を解いて来てくれた。

風間から「俺が事の真相を話そうか？」と提案してくれたが、きっぱり断った。出来れば自分の力で誤解を解きたい。俺が付き合っていた人間関係が発端な訳であって、風間達はそれに巻き込まれたんだ。

確かに風間達にも非がある。だけど俺と風間はもう友達になって、それまでの経緯をチャラにしたんだ。だったら以前の自分の身から出た錆（さび）は自分で後始末をする。最初から貸し借りのある関係にしたくないんだ。

最初は飽くまでも対等な関係で、相手の事を理解することを第一にする。その後、互いに困ったことが在ったら互いに利益に関係なく助け合う。これが俺の友人関係の理想だ。

だから今は助け合う時ではない。これくらいの事は自分でどうにかするさ。

しかし、この頃の百代さんは何か大人しい。出会った頃と違い、何か自分の内に溜めこんで、それを吐きだせずに我慢しているようだ。

本人に遠回りに訊いてみたが、全然答えらしい答えが聞けなかった。

どうやら風間達も知らないようで、毎日百代さんはバイトに明け暮れている。

仲間内にも話せないものを百代さんは背負っている。背負わざる終えない状況に置かされている。

百代さんの性格から察するに、相談したくても相談できないんだ。

ならそっとしよう。

ここで助け船を出しても、百代さんには苦痛にしかならないと思う。俺の当てにならない直感がそう伝えてくれる。

ここは見守るしかない。百代さんが限界に、手遅れになる前に助けるまで。

「へいへいへーい！　まゆっち一緒に昼飯食おうぜ！！」

「は、はい、シンくん」

隣の席にいるまゆっちの席を俺の席と合体。互いに弁当を広げる。

黛からまゆっちへの渾名へ、伸二がシンくんに移行したのはつい先日、互いに渾名で呼び合った方が友達らしくていいとまゆっち案。しかし表情は硬いままだ。たまに俺との会話で素の笑顔を見ることがある程度

昨日からクラスは段々と明るくなってきた。俺が無害であると気付き始めたんだ。

茶髪の方は何とか俺が自宅まで謝りに行って登校してきたが、髪を黒髪に戻してピアスも取って普通の姿になった。

もう片方は手遅れで、学園で漏らしたことがショックで遠くの学校に転校してしまった。申し訳ない気持ちで一杯だ。

『ハァイエブリバディ、今日は残念な知らせだ。今日のＬＯＶＥかわかみは休止です。川神百代さんの体調不良が原因です。体調不良というのは建前で、実は今日の百代さんは機嫌が悪いんだ。皆も百代さんに会ったら下手な行動をしないように。俺なんかただ少女についての魅力を語っただけで怪我しちゃったよ』

それは井上が悪いだろう。井上の少女趣味はもはや犯罪の域だからな。逆に抑制だけですんで良かった。下手すれば警察のお世話になる。

「お、そのハンバーグ美味そうじゃん。まゆっちが自分で作ったの？」

「はい。全部お手製ですよ」

「お手製良いよね。コンビニの弁当では味わえない家庭の味が俺は好きなんだけど」

生憎(あいにく)俺のキッチンは改善作業で忙しくて使用どころか進入禁止。普段は経費削減の為にコンビニ弁当は滅多に食べない。

「一欠けら食って良い？」

「はい。取って良いですよ」

そう言ってまゆっちは弁当を俺に差し出す。弁当箱の中の小さく切り分けられたハンバーグを一つ取って口へ運ぶ。

「――う」

「あ、お、お口に会いませんでしたでしょうか！　申し訳ございません！！」

「うめえじゃん！！　これお母さんが作ったの？」

「え？　ええ！　美味しいです、か」

「ああ。メッチャ美味い。冷めているのに肉汁が口の中に溢れてくる。何を入れてるの？」

「じ、実は鳥ひき肉を入れてました。鶏肉の肉汁は人間の体温で解けるので、冷めても肉汁が溢れる仕組みとなっています」

成る程。鶏肉か。今度弁当を作る時に試してみよう。

「やったぜまゆっち！　伸二の好感度がアップだ！！」

「はい、松風！　普段から弁当を作ってた甲斐がありました！！」

なんだかまゆっちと松風の腹話術も慣れたな。最初どんな自作自演だよと突っ込んでいたけど、松風はまゆっちが出せる本心でありもう一人のまゆっちなんだ。内気な性格が造り出した理想の自分の姿の一つだと俺は考える。

「よ、よよ良かったら他にも食べませんか？！」

テンパった様子でまゆっちが俺に他のおかずも進める。

「大丈夫だよ。これ以上俺が食うとまゆっちの分が無くなるだろ？」

「で、でわ、こ、こここお、これから私が、べ、べんちょうを作ってきまショーカ！」

所々噛んでいたが、話の内容は理解した。これからまゆっちが弁当を作ってきて来るかどうかという事か。

「いや、遠慮するよ。そう言うのは彼氏が出来たら、彼氏にしてあげろよ」

「彼氏？！　そんなもの私にいません！」

「うん。わかるよ？　いたらまず俺と昼一緒に食べないでしょ？」

なんだか余計テンパってしまったな。まゆっち的に友達の親睦を深めるために弁当を作ってくれると言ってくれたのかな？

その後、まゆっちとの他愛も無い話に花を咲かせ、本日のメインイベントが待ち受ける放課後へと時が進んだ。

第八話　はじめての金曜集会　其の一（後書き）

ども、おてあらいだんごではございません。みたらしだんごです。
次回、其の二で風間ファミリーが総出演を果たします。
では、また次回会いましょう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4821x/

真剣で私と戦いなさい!!

2011年10月22日02時11分発行